

引率セシメ奈良縣大阪府京都府静岡縣へ出張研究ヲナサシメタル
コト是亦前年ニ同シ

本校ハ皆通學ナルヲ以テ寄宿舎ニ關シテハ申報スヘキ事項ナシ
將來施設上重要ト認ムル件

甲 留學生増派ノ件
〔明治三十九年〕大正二年度
〔報告と同文につき省略。〕

乙 生徒實地研究費増額ノ件
〔明治四十一年〕大正二年度
〔報告と同文につき省略。〕

丙 建築科特置ノ件
〔明治四十四年〕大正二年度報
告とほ同文につき省略。〕

丁 寫真科本設置ノ件

寫真學ハ歐米ニ於テハ一學科トシテ大學ニ講座ヲ設ケ又ハ美術
學校高等專門學校ニ寫真科ヲ置キ若クハ米國ガ大學ヲ設クルガ
如キ或ハ寫真研究所ノ施設ヲナシ以テ學科ノ研究ト技術者ノ養
成ニ多大ノ努力ヲナスノ現況ナリ 然ルニ本邦ノ實況ヲ顧ルニ
斯業漸ク社會重要ノ位置ヲ占ムルニ至レルニ拘ラス其從業者ハ
多クハ寫真師徒弟ノ出身ニシテ學問ノ素養アルモノ少ク學術ノ
進歩ト追隨スルニ難ク技術進歩ノ遅々タルハ固ヨリ其所ニシテ
從テ寫真技術家ヲ養成スルノ施設ヲナスハ今日ヨリ急務ナルハ
ナシ 本校既ニ製版科ヲ置カレ尋テ臨時ニ寫真科ヲ設ケラレタ
ルモ差向キ當業者ノ寄付金等ヲ以テ授業上ノ費途ニ充テツ、ア
ルノミニシテ未ダ此科ノ設備ヲナスヲ得ズ 依リテ此際本校豫
算ニ計上セル所ノ金額ヲ支出セラレ永久ニ此科ヲ置キ設備ヲ完
全ナラシメンコトハ切ニ望ム所ナリ

戊 陳列館新設ノ件
〔大正二年度報告とほ
同文につき省略。〕

雜件

生徒實驗ノ資ニ供スルタメ諸所ノ依頼ヲ受ケ製作ニ從事シタルモ
ノ、中重モナルモノヲ舉グレバ左ノ如シ

依頼製作品一覽

品名	數量	受託年度	竣工年度内 工別未竣工	依頼者
中央停車場壁畫	拾五坪	前年度	竣工	鐵道院
松方侯爵銀像	壹軀	本年度	同	日本赤十字社
純銀製香爐	壹合	同	同	宮内省調度寮
貳拾五菩薩來迎圖模本	壹枚	同	同	臨時博覽會事務局
大正博覽會賞牌（容器共）	九千六百 卅六個	同	同	東京府
純銀製花瓶	壹對	同	同	福岡縣八幡町役場
純銀製花瓶	壹對	同	同	東京府
純銀製楠公坐像	壹軀	同	未竣工	木南正宣職
片岡直溫銀像	壹軀	同	同	日本生命保險株式會社
梨子地御紋散シ時絵御書棚	壹架	同	同	宮内省調度寮
故佐竹侯爵銅像	壹軀	同	同	戊辰勤王記念銅像建設 委員長遠山規方

『東京美術學校校友會月報』記事抜粹
東京美術學校近事〔十二〕九。T・三・二・二八
年 月 日

○職員の敘位 去る一月二十日付を以て、本校教授岡田秀氏は正七
位に昇敘せられ、助教授正八位長原孝太郎氏は從七位に昇敘、書記
高田松男氏もまた從七位に敘せられたり。
○磯野書記の休職 書記磯野富之助氏は、去る一月廿三日付を以て

文官分限令第十一條第一項第四號に依り休職を命ぜられたるが、同氏は自今大正博覽會美術部の囑託として、同會へ勤務せらるゝことゝなれり。

○文庫主任の任命 書記北浦大介氏は、去一月二十三日付を以て、文庫掛主任を命ぜられたり。

○職員中の動靜 教授岩村透氏は、舊臘より四國九州地方へ旅行せられたるが、一月初旬歸京せらる。△教授黒田清輝氏は、前號にも見えたる如く、嚴父の病氣を見舞はんため、一月七日東京を出發して、郷里鹿兒島に歸省せられたるが、恰も櫻島の爆發に會し、重病中の嚴父と共に避難したるなど、困苦せられたるよしなれども、又初めより噴火及避難の實況等をも視察し得たるは、却つて好機會に遭遇したるなりと談り居られたり。△寺崎〔広業〕教授は一月初旬より神戸地方へ旅行せらる。△書記北浦大介氏も亦一月初旬嚴父の病氣危篤の報に接し、倉皇郷里奈良へ歸省せられたるが、遂に一月十四日嚴父の遠逝に會ひたるは、痛惜察すべし。△鎌田〔弥寿治〕教授は、一月廿六日の夜北堂危篤の報知を得て、直に郷里徳島へ歸られたるが、幸にも快方に向はれたれば、二月四日歸京せられたり。△水谷〔鉄也〕助教授は先頃本郷區駒込神明町三十六番地へ移轉せられたり。△石田〔英一〕助教授も、一月末北豊島郡日暮里町字日暮里千〇三十七番地へ轉居せられたり。

○俱樂部の修飾と増築 本年本校の開校滿二十五年紀念祝賀に關し、本校卒業生諸氏は、此際を好機として開校滿二十五年紀念祝賀贊助會なるものを組織し、本年を紀念すべき何物をか貽さんとの決議をなし、結局從來の俱樂部（今會議室と名づく）を其名の如く眞

の俱樂部に充用し得る様に修飾して集會懇話の場となし、また地方にある卒業者上京の利便をも謀りて宿泊所等に充てんとの希望を以て、新たに小使室平屋一棟、二階建一棟、附屬室等を連續建築するの計畫をなし、卒業生一同の贊助を得、其寄附金を以て完成することゝなり、數次の會合を重ね、正木〔直彦〕校長とも協議を遂げて、之に著手することゝなれりといふ。而して又一方に於ては、本會も亦委員會を開きて此舉を贊し、積立金の内より金千五百圓を支出することゝなれり。されば前述の從來の俱樂部の修飾及建増新築の費用は、卒業生の寄附金及校友會の支出金にて完成する譯にして、卒業生諸氏の寄附金は一人一二口より多きは百口位にて二月半その人員二百許にして此の金額千圓以上（發起人の分は目下協議中なりと）の申込ありといふ。今其の修飾建増の模様を聞くに、從來の俱樂部は支關を新築し、内部は天井、襖、疊等を新たに調へて完成し、今回新築の分は、之に接續して動物園によりたる方に増築する筈にて、前記の小使室平家四坪、二階家建坪十四坪、附屬家平家十二坪にして、之に廊下便所等六坪位なりといふ。

東京美術學校近事〔十二—一〇。T・三・三・二八〕

○職員近況 囑託關係之助氏は、遊就館の用務にて二月五日より四週間の見込にて、中國地方へ出張せらる。△岩村〔透〕助教授は宿痾の爲、一月末より引籠療養せられしが、三月初め快癒に向ひ出勤せらる。△囑託關野〔貞〕博士は、郷里越後にある嚴父の遠逝の報に接し、二月廿六日歸省せられたり。

○紀念俱樂部の建築 紀念俱樂部新築の事に就ては、前號にも報したる處ありしが、此程地形も出來したるを以て、三月初めいゝ／＼その建築にとりかゝりたるが、落成は四月末か若くは五月なるべしといふ。又從來の俱樂部の方も目下修飾を急ぎつゝありて、此分は三月末位までには竣工の見込みなりといふ。

○卒業式紀念式の日取 例年の本校卒業式は、三月二十九日の午後舉行することゝなり居れるが、本年は開校滿廿五年紀念式も行ひ、且つ展覽會をも催すこととなれば、その都合上四月に入りて之を舉行することとなれり。即ち四月二日午後一時より卒業式を舉行し、同二時頃よりは紀念祝賀式新築落成披露式等を行ひ、式後に於て招待諸賓に展覽會の觀覽を乞ふことゝなし、一般の觀覽は四月三日より五日迄と内定したり。又展覽會場としては、美術部校舎の階上階下及煉瓦造建物の全部を以て之に充て、開校以來の卒業製作及本年の卒業製作と、本校所藏參考品の大部分を陳列し、場合によりては工藝部をも會場に充て、工藝各科の生徒成績等を陳列するやに傳ふ。

東京美術學校近事「二三」一。T・三・五・三一

○久米「桂一郎」教授の昇叙 久米教授は去る三月三十日付にて、正五位に叙せられたり。

○岩村「透」教授の休職と渡歐 岩村教授は三月三十日付を以て、文官分限令第十一條第一項第四號によりて休職を命ぜられたるが、四月八日東京を出發し、同十一日神戸より乗船、向ふ一ヶ年間の豫定にて、歐米に向ひて渡航の途に上られたり。

○大正博の審査官 本校職員中左の諸氏は四月十五日付にて、何れも東京大正博覽會審査官を囑託せられたり。

教授高村光雲△同黒田清輝△同竹内久一△同海野勝珉△同岡田三郎助△同和田英作△同大澤三之助△同海野美盛△同白山福松△同寺崎廣業△同古宇田實△同白井保次郎△同島田佳矣△同櫻岡三四郎△同小堀輅音△同藤島武二△囑託岡田信一郎（以上十七氏）

○第二十三回卒業證書授與式 本校第二十三回卒業證書授與式は、四月二日午後一時より舉行せられたり。例年は三月二十九日を以て式日とせらるれども、本年は開校滿二十五年紀念式及展覽會等の關係より、四月に入りて舉行せられたるなり。式場は例によりて講堂を以て之に充て、各所來賓、卒業生來賓、本校職員、卒業生の著席するや、正木「直彦」學校長は式辭に引續きて、各本科生七十人撰科生十三人計八十三人に順次卒業證書を授與せられ、尋で卒業生に對して告辭を陳べられ、次に文部大臣代理丸山文部督學官は、文部大臣の訓辭を朗讀せられ、卒業生總代圖案科木村得三郎氏の答辭ありて式を終り、職員卒業生は紀念撮影をなしたり。卒業生姓名、文部大臣訓辭、卒業生答辭等は左の如し。

卒業生姓名（○印は教員志望者）

日本畫科

本科	齋藤敬一郎	東京府平民
同	寺門 祐之	茨城縣平民
同	立野 甚一	富山縣平民
同	石川 廣助	茨城縣平民
同	根岸 庄助	埼玉縣平民

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同				
山田	原	楠本	服部	○兒玉直之助	影刻科	林	河村	岡崎	幸崎伊次郎	川島	熊澤熊太郎	横江	三浦	藤田	渡邊	圖按科	安藤喜八郎	木村得三郎	飯野	松本	伊藤	○藤村彦四郎	板倉
實	詔光	秀男	亮英			健市	弘	朋邦	伊次郎	鼎三	嘉純	長壽	龜久	信助			神奈川縣平民	宮城縣土族	福島縣平民	東京府土族	愛知縣平民	佐賀縣平民	東京府平民
茨城縣平民	富山縣土族	和歌山縣平民	三重縣平民	秋田縣平民		廣島縣土族	岐阜縣平民	富山縣平民	石川縣平民	栃木縣平民	兵庫縣平民	東京府平民	靜岡縣平民	東京府平民	愛媛縣平民								

同	○專頭憲太郎	大分縣士族
金工科		
本科	大森 俊治	茨城縣平民
撰科	近藤 岩太	香川縣平民
同	村田延之助	東京府平民
同	渡邊 健吉	千葉縣平民
鑄造科		
本科	西村 敏彦	東京府士族
漆工科		
本科	石崎 誠二	富山縣平民
同	五十嵐三次	富山縣平民
同	河野 順一	東京府平民
同	芝山 清次	富山縣平民
同	蓮花 宗二	富山縣平民
同	増川 金松	石川縣平民
撰科	相崎 茂吉	宮城縣平民
圖畫師範科		
	尾川藤十郎	群馬縣平民
	小林 長太	長崎縣平民
	塚田 清吉	茨城縣平民
	宮崎 確	熊本縣士族
	宮森正三郎	北海道平民
	太田政太郎	香川縣平民
	横山 貞通	長野縣平民

卒業生科別人員比較				
科名	昨年の 本科生	同 撰科生	本年の 本科生	同 撰科生
日本畫科	一九	四	九	四
西洋畫科	二五	三	二〇	一
彫刻科	一一	五	五	五
圖按科	六	一	八	一
金工科	一	一	一	三
鑄造科	一	一	一	一
漆工科	四	二	六	一
師範科	一八	一	二〇	一
計	八五	一四	七〇	一三
高橋 房雄	宮城縣平民			
久保 一	福井縣平民			
木南三千三	兵庫縣平民			
大脇 朝一	岐阜縣平民			
西銘 生樂	沖繩縣士族			
接待 庸夫	青森縣士族			
平岡 信敏	熊本縣士族			
中島繼次郎	埼玉縣平民			
田中 卓爾	静岡縣平民			
本間 忠三	山形縣平民			
那須 義美	山形縣平民			
中堀 愛作	岡山縣士族			
有馬 廣厚	福岡縣士族			

文部大臣訓辭

美術の世道人心に關するや大なり。豈啻に昭代文明の英華たるのみならんや。東京美術學校卒業生諸子、今や校門を辭し、新進の藝術家として將に社會に立たんとす。冀はくば諸子其の抱負を高大にし、其の用意を續密にし、技術徳性併せ研きて、將來に大成せんことを期せよ。

若夫れ教育の任に當るものは公務を奉ずること忠實に生徒を導くこと惻切に、獨り技藝の師たるのみならず、人格徳操に於ても、亦衆生に範たらんことを努めよ。一言望む所を諒げて祝辭とす。

大正三年四月二日

文部大臣 大岡 育造

卒業生答辭

維時大正三年四月二日、春風駘蕩として櫻花將に爛熳たらんとす。加ふるに大正博覽會の開催するありて、一代の精華は擧げて東臺の天地に網羅せらるゝの壯觀を呈す。此の千歳一週の佳辰に當り、本校第二十三回卒業證書授與の盛典を舉行せられ、文部大臣閣下を始めとし、朝野諸名士の臨席を辱うし、特に懇篤なる諭辭を賜はる。

生等の光榮何ものか之に如かん。

顧ふに生等本校に學ぶこと既に五星霜、其の間各々志す所に從ふて藝術の一端を學び、茲に其の業を卒へ、併せて將來を身を立てるの基礎を確定し得るに至りたるは、之れ偏に學校長諸先生の教訓指導の賜に外ならず、豈感佩の至りに堪へざらんや。

然り而して美術の事たるや、元と天才と鍊磨とに待つこと多く、其の成功を見るの期は、百般の學業に比して極めて遅きものあり、生等今僅かに技術の初歩階梯を學び得たりと雖も、前程を望めば猶遠にして、其の蘊奥を究めんとするに於ては、眞に畢生の努力を要す、今日の小成に

安んずることなく、將來の萬難に屈することなく、益奮勵研鑽を重ねて大成の域に進み、以て大正聖代の斯道に貢獻し、本校の名譽を發揚して高恩に酬ひ、延いては國運興隆の一助たらんことを期せん。

若し夫れ教育に従事するものにありては、本校教養の趣旨に法り、誠意忠實其職に盡して子弟を教導し、且社會に於ける高尚なる美術思想の普及を計り、以て國家の豫期する所に悖るなからんことを期す。聊か蕪辭を述べて答辭となす。

大正三年四月二日

東京美術學校第二十三回卒業生總代 木村得三郎

○新入學生 本年の入學志願者選抜試験は例年の如く、三月三十日より始め四月一日各科とも終りを告げ、同月七日に至りて官報を以て、入學許可者の人名を發表せられたり。其科別人名人員比較等左の如し。

豫備科（日本畫科志望）

古谷 忠夫	山口士	岡田 忠邦	香川平
漆原啓之助	香川平	谷 公	山形士
菊池 寅三	東京平	藤原 律太	岡山平
小倉和一郎	東京平	畑 保之	東京士
菅野 泉	宮城士	村上 友一	富山平
竹田 二郎	静岡士	大貫 堅	栃木平
森 戡一	高知士	石井 義一	千葉平
九里 厚博	新潟士	犬童 秀邦	鹿兒島士
龍居 昌吉	東京平	井上 恆也	静岡平
北村 寛永	石川平	番匠 雄岳	石川平

吉田 守通	石川士	狩野政次郎	和歌山士	野口 益	石川平	本牧 太一	神奈川士
柳澤 眞一	長野平	望月 尙	山梨平	吳 樂三	東京士	安藤 春雄	茨城士
豫備科(西洋畫科志望)				豫備科(彫刻科木彫部志望)			
井澤 龍海	長崎士	蘆立 文雄	宮城平	杉峰 幹雄	山口平	戸田 傳次	富山平
齋藤 廓	和歌山平	大内 齊	東京平	秦 紹世	富山平	鎌野 正美	香川平
大津 逸次	熊本平	中山 巍	岡山士	池田卯之助	香川士		
里見 勝藏	京都平	鈴木 清一	茨城平	豫備科(彫刻科牙彫部志望)			
藤谷 俊造	廣島平	高橋 篤治	石川平	笹野 惠三	神奈川平	竹内 ^(武田) 増治	大阪平
宮坂 勝	長野平	太田 勝二	東京平	豫備科(圖按科志望)			
須永美佐雄	栃木平	神谷 万吉	愛知平	關 敬信	茨城士	吉岡吉太郎	石川平
西村 叡	神奈川平	頓野 保彦	山口士	阪 秀太郎	東京平	山田 猷	埼玉平
武井 武雄	長野平	島崎 敏夫	北海道平	竹林 義一	富山士	伊澤晴太郎	宮城平
島田 謙三	福井平	吉岡貫一郎	宮城平	森 ^(小) 三樹	長野平	松田長次郎	岐阜平
小原 整	鳥取士	阿川 徹照	山口平	中川文太郎	石川平	藤崎 邁象	福岡平
石井 一	宮城平	澤枝 重雄	北海道平	北 久衛	石川平	林 清一	石川士
高橋涉之介	新潟平	清水龜太郎	廣島平	高杉 正實	廣島平		
有光 健治	山口平	野口 六藏	長崎平	豫備科(金工科志望)			
水平 讓	秋田士	小野麟之助	愛知平	久松 協	東京華	吉井 勇	香川平
植木 辰夫	山口士	宮原 七二	鹿兒島平	井關 知溫	鳥取平	杉浦 哲三	北海道平
岡部敬之助	栃木平	岡田 富藏	東京平	豫備科(鑄造科志望)			
豫備科(彫刻科塑造部志望)				本間 幸平	栃木平	平田 錦三	東京平
川邊 繁藏	埼玉平	福田 正一	香川平	豫備科(漆工科志望)			
朝香 謙	神奈川平	島村 治文	高知士	成田 隆吉	愛媛士	松田 權六	石川平
井上 襄	兵庫士	平岡 寛之	廣島士	平野 清吾	岩手平	福澤 健一	富山平

辻 正作 香川平
北森 角二 富山平

圖畫師範科第一年級

林 義明 和歌山平
早川 貞明 茨城士

大迎 左文 兵庫平
松田 義之 愛知士

福田 惠一 廣島平
諸橋 政範 新潟平

坪田 繁 福井平
兼子 秀賢 茨城士

饗場 基實 山梨平
太田 留雄 福島士

半田 一雄 廣島平
篠崎松太郎 長島平

備考 以上の中、西洋畫科の岡部敬之助、岡田富藏、彫刻科（牙彫部）
の笹野恵三は四月十日に同竹内増治は四月十五日に入學を許された
るものなり。

久保 潤治 群馬平
三森 連象 秋田士

宮本 幸恵 鳥取平
松岡 正雄 奈良平

吉岡 修三 千葉平
石野 隆 岐阜士

片岡 憲輔 福岡平
高橋 吉雄 岩手士

神田 義富 山梨平
曾野 勝巳 三重士

長澤喜久治 京都平
辰野源太郎 長野平

池龜 文次 新潟平
奥井 直義 富山平

入學志願者及許可者比較表

志望科別 昨年の 許可者 本年の 許可者

日本畫科 二七 二二 四〇 二四

西洋畫科 一〇五 三五 一〇八 三四

彫刻科（塑） 一三 九 一四 一〇

同 (木) 二 二 七 五
同 (牙) 〇 〇 二 二

圖案科 三一 一二 三〇 一三

金工科 五 四 八 四

鑄造科 四 三 二 二

漆工科 一〇 八 九 八

師範科 五五 一八 五二 二四

計 二五二 一一三 二七二 一二六

○研究科入學と再入學 左の諸氏は各頭書の日を以て、各研究科入學、並に再入學を許可せられたり。

研究科入學

四月九日 (西、本) 森脇 忠

同 (同) 淺井 政藏

同 (同) 岡見 富雄

同 (同) 久保 篤敬

同 (同) 平田 宗胤

同 (同) 長崎 了恵

同 (同) 原 詔光

同 (同) 小林 克己

同 (彫、本) 中谷 宏運

同 (同) 幸崎 伊次郎

同 (同、撰) 三浦 長寿

同 (同、本) 齋藤 佳藏

同 (同) 飯野 眞悟

同	(漆、本)	石崎誠二
同	(同)	五十嵐三次
同	(同)	芝山清次
同	(同)	蓮花宗二
同	(同)	増川金松
四月十日	(日、本)	齋藤敬一郎
同	(同、撰)	龍信五郎
四月十三日	(圖、本)	安藤喜八郎
再入學		
四月一日	(日、撰二へ)	佐取輝三
	(日、四へ)	清家恕

備考 (西、本)は西洋畫本科研究科の入學なり。餘は之に倣ふ。

東京美術學校近事「一三一—二。T・三・六・三〇」

○職員の近況 本年一月以來病氣療養中なりし、本校囑託大島勝次郎氏は、此程漸く快癒せられたれば、六月三日より出勤せられたり。△石田「英一」助教授も前號に記す如く病氣中なりしが、是亦幸に快癒に向はれたるを以て、過般來伊豆山湯河原等に轉地療養中なりしが、此程歸京、六月九日より登校せられたり。△本校臨時雇たりし吉本吉右衛門、杉浦青治の兩氏は、何れも五月二十日、雇申付けられたり。

○俱樂部の修飾工事及新築 兼て屢々本誌に記したる從來の俱樂部の修飾及卒業生贊助會の新築俱樂部は、共に其工事に進捗し、從來

の俱樂部の方は、玄關の改造、天井、長押、欄間、障子等の新調など、それ／＼竣成し、今後は疊敷物等の設備を残すのみとなり。また卒業生贊助會にて記念新築の二階建の方は、兼て設計の繪圖面によりて、着々工事を急がれしが、是亦漸く此程竣成を告げ、疊建具等も完成してなかなか立派に出来上りたり。されば此建物の方も、今後は諸器具の設備さへ整はゞ、使用するを得るまでに至りたれば、委員諸氏は着々それ等に就いて手筈をなしつつありといふ。

○記念植樹會 兼て發表せられたる同會もまた諸氏の贊助によりて、多數の苗木を得たるを以て、本校構内の各所に之を植ゑ付けた

東京美術學校近事「一三一—三。T・三・七・三一」

○小林留學生歸朝 文部省留學生たる本校助教授小林萬吾氏は、久しく歐洲に留學して西洋畫研究中なりしが、去る六月三日無事歸朝せられたり。

○臨博の評議員 正木「直彦」本校長は、六月二十三日付を以て、臨時博覽會評議員を仰せ付けられたり。

○寺崎教授の敘勲 教授寺崎廣業氏は、六月二十九日勲六等に敘し、瑞寶賞を授けられたり。

○書記の新任 本校雇中澤治之助氏は、六月三十日付を以て、本校書記に任ぜられ、故の如く會計掛を命ぜらる。

○關野囑託の留學 本校囑託關野貞氏は、建築史研究のため、滿二ヶ年間英國佛國及伊國へ留學を命ぜられたるが、多分來年一月に至りて、本邦出發の事になるべしといふ。

○白濱〔徴〕教授の出張 七月十九日は 昭憲皇太后御百日祭に付、文部省部内の奏任官總代として同氏出張のこととなりたるを以て、往復五日の見込にて、七月十七日出發、伏見桃山へ向はる。

○職員の見込 去る四月歐洲へ向ひて出發せられたる岩村〔透〕休職教授は、五月二十八日無事巴里に到着せられたるよし。△島田〔佳矣〕教授は例年の如く、本年もまた八月一日より九月初旬に涉りて、山形縣下に於ける夏期講習會に出張せらるべしと。△文庫掛の荒木榮治氏は、今般養子縁組によりて「小泉」と改姓せられ、下谷區谷中天王寺町二三へ移轉せらる。△囑託大島勝次郎氏は、此程田端三百四十番地に轉居せらる。△教授海野美盛氏は、七月廿五日より八月中旬迄、昨年の例により、鹿兒島市主催の講習會講師として出張せらるべし。

東京美術學校近事〔一三—四。T・三・九・三〇〕

○審査委員の任命と囑託 本年秋季に開かるゝ第八回の文部省美術展覽會に於ける美術審査委員會委員として、去る八月十一日付を以て、本校教授中任命を見たるは、高村光雲氏は第三部主任を、寺崎廣業、小堀鞆音の兩氏は第一部員を、黒田清輝、岡田三郎助、和田英作、藤島武二の四氏は第二部員を、白井保次郎氏は第三部員を命ぜられ、又八月二十五日付を以て、學校長正木直彦氏並に教授中海野〔勝珉〕、岡田〔三郎助〕、島田〔佳矣〕の三氏は、第二回圖案及應用作品展覽會審査委員を囑託せられたり。

○轉任の諸氏 教授大澤三之助氏は八月十二日、宮内技師〔高等官

三等〕に榮轉し、内匠寮勤務を命ぜられ、助教授黒岩倉吉氏は、同月二十八日大阪府立職工學校教諭に榮轉せられたり。

○演習及充員召集 雇助手篠田十一郎氏は、演習のため八月二十五日より三週間歩兵第六十八聯隊へ召集せられ、助教授石田英一氏は、同月二十日、時局のため、充員召集に應じ、久留米歩兵第五十六聯隊へ入隊せられたり。

○雇員の移動 本年本校圖案科卒業生安藤喜八郎氏は、八月二十六日本校雇〔圖案科助手〕を命ぜられ、雇文庫掛安井匡雄氏は、同日依願解雇せられ、同月二十七日板橋進氏は臨時雇〔文庫掛〕を命ぜられたり。

○出張の諸氏 玉田〔文作〕助教授、羽田〔禎之進〕囑託、高田〔松男〕書記の三氏は、七月より八月に亘り、相前後して静岡縣下へ出張を命ぜられて往復し、助教授小場恒吉氏は、學術研究のため九月二日より朝鮮へ出張を命ぜられて出發したり。

○職員諸氏の近況 教授海野〔美盛〕氏は、七月末より、鹿兒島市の金工講習會講師として、同地へ招聘せられ、教授島田佳矣氏は、例によりて、八月二日より九月に跨りて、山形縣下圖案講習會講師として、同縣より囑託に付出張せられたり。△雇安井匡雄氏は七月初旬母堂を喪はれ、助教授玉田文作氏も八月中旬母堂の喪に丁り、書記増井兼吉氏も八月下旬その令姉の遠逝に遭遇せらる。△助教授石田英一氏の留守宅にては、先頃日暮里町元金杉百九十六番地へ轉居せられ、雇三浦柳三郎氏は芝區白金三光町八十八番地へ移轉せらる。

○生徒の卒業 鑄造科卒業期たる常木庄藏氏は、去る三月卒業試験

の際事故延期の處、去る七月二日卒業せらる。

○本學年の特待生 學業品行共に優等の廉により、本學年の特待生に選定せられたるは、左の諸氏なり。

山崎 善次郎 (日一)	富田 賢太郎 (日四)
小泉 素彦 (西一)	飯塚 章三 (西二)
名越 豐 (西三)	木村 圭三 (西三)
及川 康雄 (西四)	北原 鹿次郎 (彫二)
雨田 外次郎 (彫三)	高須 俊彦 (彫四)
大石 清 (清一)	野澤 道平 (圖二)
林 威三 (圖三)	淺野 廉 (圖四)
高梨 靜治 (金二)	

○前學年の精勤者 前學年中、學業に精勵したる廉を以て、精勤賞狀を授與せられたる諸氏左の如し。

黑田 豐次 (前)	高木 菊太郎 (彫撰三)
齋藤 龍太郎 (金撰三)	山崎 敬正 (金撰四)
竹村 猛 (漆一)	

○本校學科目改正 東京高等工業學校の工業圖案科 (製版特修の生徒も含む) は、同校規程中より削除せられ、本校に其生徒の教育を託せらるゝこととなりたるが、從來一方に於ては、本校圖案科は工藝圖案と建築圖案と分立せしめん宿望あり、猶寫眞製版科をも増設の内議ありたる際なるを以て、本校の圖案科は此際に於て第一部 (工藝圖案) 第二部 (建築圖案) に分るゝこととなり、又製版科をも増設することとなりたれば、九月五日の官報に於て、文部省令第二十五號及第二十七號を以て、東京高等工業學校規則中より工業圖案科

(製版特修をも含む) を削り、現に同科に在學する生徒の卒業までは其科を存置して、現在同科の本科生徒五十四人撰科生徒十三人と、附設工業教員養成所生徒八人、及附屬職工徒弟學校製版科生徒十二人の教育は本校に委託することとなり、又同省令第二十八號を以て、本校の學科目及其程度に改正を施され、各本年九月十一日より實施せらるゝこととなり。その改正要旨を記せば左の如し。

第一 東京美術學校の學科を分ちて、日本畫科、西洋畫科、彫刻科、圖案科、金工科、鑄造科、漆工科及製版科とす。

製版科を除き各學科に豫備科を置く。

第二 東京美術學校の修業年限は、豫備科を通じて五個年とす、但し製版科の修業年限は三個年とす。

第三 各學科の學科目及其程度は左の如し。(課程表略す)

第四 卒業者にして既修の學科につき更に研究せんとするものは研究生として三個年以内在學せしむることを得。

第五 各學科の學科目中一科目若くは數科目を撰擇して學修せんとするものは選科生として入學せしむることを得。

附則

本令は大正三年九月十一日より之を施行す

要するに上記本校規程の改正は、圖案科を二つに分ちたると、製版科を増設され (圖畫師範科は舊の如し) たるにあり。本校規則も之に伴ひて不日改正せらるべし。

東京美術學校近事 (一三一六。T・三・十一・三〇)

○圖案科の主任 九月十一日付を以て、圖案科第一部主任は島田「佳矣」教授へ、第二部主任は古宇田「実」教授へ命ぜられたり。

○臨時博覽會鑑査官の任命 九月二十二日付を以て、學校長正木直彦、教授黒田清輝、高村光雲、海野勝珉、寺崎廣業、白井保次郎、島田佳矣、岡田三郎助、和田英作、白山福松、藤島武二、小堀鞆音の諸氏へ對し、臨時博覽會鑑査官仰付けられたり。

○高等工業學校教官諸氏の兼任 嚮に記したるが如く本校へ依託せられたる、東京高等工業學校の工業圖案科生徒教養のためと、本校へ製版科を置かれたるとにより、東京高等工業學校教授松岡壽、同結城林藏、同鹿嶋英二、同安田祿造の諸氏は何れも九月二十三日付を以て、本校教授に兼任せられ、東京高等工業學校助教伊東亮次氏は九月十四日付を以て、本校助教に兼任せられたり。

○教授の新任 工學士神木健介氏は十月二十八日付を以て本校教授に任ぜられ、高等官六等に敘せられ、圖案科第二部建築裝飾部授業を擔任せらる。

○囑託せられたる諸氏 十月十五日を以て印刷局技師矢野道也氏は本校色彩學及印刷術授業を、東京高等工業學校教授笠原留七氏は數學及物理學の授業を、藥學士小柴英侍氏は化學及化學實驗授業を、村井三吾氏は建築學授業を、何れも新たに囑託せられたり。

○雇の拜命 鈴木宮吉氏は、十月五日付を以て本校雇を命ぜられ、工藝化學教室助手申付けらる。

○岩村「透」休職教授の歸朝 兼て歐米旅行中なりし岩村教授は、去る九月廿五日無事歸朝せられたり。

○出張の諸氏 教授白濱徵氏は、師範科の學術實地指導のため、京

都、大阪、奈良、三重、兵庫の各府縣へ出張を命ぜられ、往復十日間を以て十月十四日より出發せられ、又本校生徒秋季修學旅行のため、教授福井信之進、同和田英作、同白井保次郎、助教授千頭庸哉、雇神矢教親、助教授津田信夫、同石井吉次郎、同波根義三、教授鹿島英二、鎌田彌壽治の諸氏は、各當該科に於ける學術實地指導のため各地へ出張を命ぜられ、又囑託羽田禎之進、同赤間運藏、書記高田松男、同増井兼吉、同中澤治之助、雇藤岡福三郎、同中島新助、同寒川瀨、同吉本吉右衛門の諸氏もまた各科修學旅行のために、各地へ出張を命ぜられ、孰れも十月二十六日より三間日出張せられたり。

○職員諸氏の近況 鎌田「弥壽治」教授は去る九月末本郷區駒込東片町百二十三番地へ轉居せらる。△石田「英一」助教授留守宅にては、十月上旬下谷區上根岸番町百十八番地へ轉居せらる。△久米「桂一郎」教授も先頃赤坂區青山高樹町二十番地へ移轉せられたり。△別項に記せる臨時博覽會鑑査官を命ぜられたる正木「直彦」學校長始め教授諸氏は、京都に於ける同會出品鑑査のため、十月三十一日より十一月四日迄京都へ出張せられ、且奈良正倉院を拜觀せられし向もありたりといふ。△出征中の石田「英一」助教授は、十月十一日付を以て陸軍歩兵曹長に進級せられたるよしにて、同氏の近況は、通信欄に記す處の如し。△櫻岡「三四郎」教授は先頃奈良正倉院を拜觀せられたり。

○撰科生の入學 撰科の試験は、去る九月十四日より十八日迄施行せられたるが、その結果合格したるもの、並に特別詮議を経たるものは、同月二十一日各入學を許されたり。その氏名左の如し。

日本畫撰科

吉村 忠夫 東京士

西洋畫撰科

許 敦谷 支那 崔 國瑤 支那
潘 元牧 支那

彫刻撰科(木彫)

白石 盛香 宮崎士

同 (牙彫)

後藤 清一 茨城平 岩山 敬助 鹿兒島士

金 鎮夷 朝鮮

金工撰科

小林 親光 東京平 關 省三郎 富山平
川上 勝三郎 東京平 史 秉彝 支那

漆工撰科

高井 榮四郎 新潟平 吉田 源十郎 高知平
渡嘉敷 唯尹 沖繩士 高山 光明 東京士
稻田 光太郎 東京平

○師範科第三年の修學旅行 毎年施行せらるゝ師範科第三年の修學旅行は、十月十四日より同月二十三日迄、白濱〔徴〕教授附添ひにて施行せられたり。旅行先は、京都、大阪、奈良、三重、兵庫の各府縣にして、各學校の實地授業を視察研究し、並に著名の社寺美術品等につきて觀察したり。

○各科の修學旅行 例年施行の各科修學旅行は、本年もまた十月二十六日より三日間を以て行はれたり。即ち日本畫科は栃木縣鹽原地

方へ、西洋畫科は静岡より久能山三保松原を経て、興津の清見寺附近へ、彫刻科は神奈川縣箱根地方へ、圖案科は妙義山より榛名を過ぎて伊香保へ、金工科は埼玉縣熊谷より日原を経て日向和田地方へ、鑄造科は日光地方へ、漆工科は鎌倉より箱根の底倉姥子附近へ、師範科は栃木縣足尾より湯元、日光町近傍へ、工業圖案科は青梅御嶽邊へ、製版科は伊豆の熱海、伊東、修善寺へ赴き、二十八日悉く歸京したり。

東京美術學校近事〔一三—七。T・三・十二・二五〕

○石田〔英一〕助教の近況 出征せられたる同氏の消息は前號にも載せたるが如くにして、其後柳樹臺兵站出張所にて兵站事務に従事せられしが、十一月廿三日の命にて、最初上陸したる勞山灣兵站倉庫にて勤務せらるる由。猶同氏所屬部隊の凱旋の期は十二月二十五日迄に全部引揚げの事となり居れども、同氏は内地歸還後とて、殘務整理等のため、歸京は遅るゝ見込なりといふ。

○本校の桑博出品 文部省よりの指定により、桑〔サンフランシスコ〕港萬國博覽會へ本校より出品すべきものは、兼てより協議中なりしが、去る

九月中旬計畫を決定して左記の諸品を出品することゝなし、十二月四日五日の兩日、他校の出品と共に文部省修文館に於て有志の觀覽に供せられたり。今その排列の概要を記せば、陳列壁面は横二十八尺、陳列箱は高六尺間口九尺奥行五尺の三方硝子にして、此壁面へは日本畫成績の貼込(四枚づつ) 額面貳個、圖案成績の貼込(工藝圖案建築裝飾各數葉) 額面貳個とを左右九尺宛の間にかけ、中央十

尺の場所には西洋畫成績の肖像貳面（豎額）を上部に、風景貳面（横額）を下方に掲げ、壁面上邊貳ヶ所に英文校名の額を懸く、陳列箱には天井に英文校名の額を下げ、内部周邊には、金工、鑄造、漆工の各作品を排列し、中央に高五寸長七尺四寸幅一尺八寸の臺を作り、此臺の上の中部に飾り棚を置き、木彫、牙彫、金工、鑄造、漆工の各作品を配し、棚の兩側臺上にも、彫刻、鍛金の作品を排列せり。而して別に陳列箱の内部隣りとの間仕切にも、蒔繪、鑄造、金工、芝山象嵌の額面（各一個）を掲げ、又別に本校の狀況を知らしめんがためには、英文一覽數百部を印刷して出品配付することゝなれり。出品名左の如し。

壁面に掲ぐるもの

日本畫成績貼込額貳個（草木花鳥人物の寫生）△西洋畫成績額面四個（自畫肖像貳、風景「奈良、港」貳）△圖案成績貼込額面貳個（工藝圖案一、建築裝飾一）

陳列箱内に排列するもの

彫金龍銀製扇形梅に鶯圖名刺盆△總梨子地武藏野圖蒔繪茶箱△彫金牡丹圖額△孔雀圖蒔繪色紙箱△芝山象嵌群蝶手箱△鍛金銅製群兎置物△金地向日葵圖蒔繪小硯箱△鑄造唐草模様花瓶△彫金龍銀製樹上鴉圖名刺盆△河骨圖蒔繪手箱△彫金色金嵌入森林圖額△金地棕栢圖蒔繪文箱△香の圖裂地模様蒔繪手箱△彫刻スペイン踊子（鑄造）△木彫上代人物（久斯）置物△鍛金黃銅製上代農婦置物△彫金銀製鷺置物△鑄造鳳凰香爐△鑄造青銅鳳文香爐△彫金龍銀製雪中松圖花瓶△鑄造葡萄栢榴置物△牙彫鳩置物（二羽）△鑄造渦紋花瓶△木彫彩色絃響置物△牙彫浮世人物置物△牙彫少女置物△

彫金龍銀製出山釋迦置物△平目地巴散し蒔繪菓子器△小判地源氏繪本散し蒔繪葉卷莢入箱△花車圖蒔繪香盆△彫金龍銀製龍圖香盆△月に時鳥蒔繪香合△懸崖飛瀑圖蒔繪短冊箱△彫金鷺鷥圖卷莢箱△彫金龍銀製鍾馗圖香合

陳列箱内間仕切に懸くるもの

薄蒔金地胡蝶舞蒔繪額△鑄造雨中狸圖額△布目象嵌母の慈愛額△芝山象嵌曾子圖牙木嵌入額

関連事項

① 大礼服所持者

大正三年一月十六日、文部大臣官房秘書課長より儀式祭典等に関する総代選定上の必要から大礼服所持者について報告するよう各方面に通牒が発せられた。本校の回答によると所持者は竹内久一、海野勝珉、海野美盛、寺崎広業、古宇田実、大村西崖、白浜徴、白井雨山ら教授たちで、西洋画科では黒田清輝をはじめとして一人も所持者が無かった（「大正三年文部省往復掛書」。）。

② 東京大正博覧会

大正三年三月二十日より同年七月三十一日まで上野公園を中心会場として東京府主催の東京大正博覧会が開催され、本校教官の中にも美術部の審査に加わった人が多かった（572頁参照）。この博覧会は上野公園と不忍池畔にセセッション式や東洋式の展示館が数多く建てられ、東京府をはじめ北海道庁、二府四二県、各省官立諸学校、研究所、試験所、台湾朝鮮両総督府、関東庁、樺太庁、諸外国が出